

令和 2 年 5 月 8 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15H01899

研究課題名(和文) 千島アイヌの起源と経済史に関する考古学的研究

研究課題名(英文) An Archaeological Study on the Origin and Economic History of the Kuril Ainu

研究代表者

高瀬 克範 (Takase, Katsunori)

北海道大学・文学研究院・准教授

研究者番号：00347254

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 32,000,000円

研究成果の概要(和文)：千島列島の先住民である千島アイヌの起源地は、南サハリンもしくは南千島である可能性が高いことを考古学的な検討を通して明らかにした。また、千島アイヌは、15世紀に成立した当初、千島列島ではなく南カムチャツカを本拠地としていたが、18世紀初頭にカムチャツカの利用をほぼ停止し、千島列島に本拠地を移したことも明らかにした。千島列島ではもともとカムチャツカ起源の陸獣を多量に利用していたわけではなく海洋資源に大きく依存していたため、カムチャツカ撤退以後も千島列島内の経済に大きな変化は生じていなかったことが、動物骨の検討から予測された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

千島アイヌの起源、カムチャツカからの撤退時期、それに伴う経済の変化は、当事者たちが残した同時代の資料によって検討されることがこれまでほとんどなかった。本研究は、既存の発掘資料を利用するだけでなく、訪問すら極めて困難な地域でのフィールドワークから得られた新資料をも用いて、千島アイヌの歴史復元に取り組んだ初めてのプロジェクトである点に高い学術的意義がある。また、千島アイヌは日本政府による強制移住を契機として消滅した民族であるがゆえに、日本人の研究者が主導する国際的なプロジェクトによってその歴史が解明されたことに大きな社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study revealed that the Kuril Ainu, an indigenous people of the Kuril Islands, were formed by the immigration from Southern Sakhalin or the Southern Kuril Islands based on archaeological examinations. Also, this study demonstrated that their retreat from Southern Kamchatka was caused in the beginning of the 18th century although they mainly occupied Southern Kamchatka between the 15th century and the 17th century. Because terrestrial animals of Kamchatka had not been actively used in the Kuril Islands in this period, there was no significant change in their economy after they stopped using Southern Kamchatka in the beginning of the 18th century.

研究分野：考古学

キーワード：千島アイヌ 千島列島 カムチャツカ半島 考古学 動物遺存体 竪穴住居 放射性炭素年代測定

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

千島アイヌは、アイヌ語の千島方言を使用していた千島列島北半部の先住民である。1884年に南千島の色丹島に強制移住させられた直後から人口が急減し、20世紀中に文化継承者が不在となった。ロシアでは17世紀末から「クリル」の名で文献史料に登場し、日本でもやや遅れて記録が残されるようになる。それらによると、千島アイヌは千島列島内を活発に行き来し、北海道アイヌ、カムチャダル(イテリメン)、ロシア人など、隣接諸集団と積極的に交易を行っていた。17世紀から18世紀初期には千島列島だけでなくカムチャツカ半島南部にも居住していたことが知られ、この理解はカムチャツカのアイヌ語地名からも支持されている(Murayama, S. 1968 *Ainu in Kamchatka, Bulletin of the Faculty of Letters Kyushu University*, 12)。しかしながら、千島アイヌの成り立ち、居住域の変化、それに伴う生業・資源利用・食料実情の推移などは、ほとんど明らかにされてこなかった。

ところが、ここ10年ほどの考古学的研究により、千島アイヌは15世紀半ばに出現し、当初、本拠地はカムチャツカのほうにあったことが明らかにされてきた(Takase, K. 2013 *Chronology and age determination of pottery from the southern Kamchatka and northern Kuril Islands, Russia. Journal of the Graduate School of Letters*, 8; 高瀬克範 2015「カムチャツカ半島南部出土内耳土器とその千島アイヌ史上の意義」『論集忍路子』IV; Takase, K. and A. I. Lebedintsev 2016 *A study on pottery from Southern Kamchatka in T. M. Dikova and N. N. Dikov collections, Journal of the Graduate School of Letters*, 11)。その一方で、17から18世紀のいずれかの段階でカムチャツカの利用を大幅に縮小し、拠点を千島列島へと移したことも確実に視できるようになってきている(図1)。

それでもなお、この民族がどこからやってきたのか、カムチャツカの利用を大幅に縮小したのはいつなのか、カムチャツカ撤退前後でどのような経済の変化が生じたのか、などについては明確にはなっていなかった。そこで本研究では、1)千島アイヌの故地、2)カムチャツカからの撤退年代、3)その前後における経済の変化、といった課題に考古学的手法を通して取り組むこととした。

2. 研究の目的

千島アイヌの故地にかかわる仮説には、大きくわけて2つがある。ひとつは、サハリン起源説である。アイヌ語使用集団が使う杓子は、物質文化論の観点からみて北海道とサハリンのあいだで明確に異なっており、千島アイヌのそれはサハリンに類似する。また、煙草ケースなどその他の要素にも、北千島とサハリンのあいだで共通点がある(小杉康 1996「アイヌの杓子」『物質文化』61)。千島方言の語彙は、北海道方言とサハリン方言の双方と接点をもつが、容易に変化しにくいと考えられる親族呼称や天体などに関する語彙で千島方言とサハリン方言との類似性が認められる(中川裕 1996「言語地理学によるアイヌ語の史的研究」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2)。こうした点を考慮して小杉康氏は、千島アイヌの歴史がサハリンと密接な関係を有していたと考える。もうひとつの仮説は、道東・南千島起源説である。瀬川拓郎氏は、地名や考古学的遺跡の分布などを手がかりに、道東や南千島でオホーツク文化の末裔と同化した集団が北上し、千島アイヌになったというシナリオを提唱している(瀬川拓郎 2011「アイヌ史における新たなパースペクティブ」『アジア遊学』139; 瀬川拓郎 2013『アイヌの沈黙交易 奇習をめぐる北東アジアと日本』新典社; 瀬川拓郎 2015『アイヌ学入門』講談社)。

千島アイヌは、15世紀の成立当初から精巧な土器や竪穴住居を積極的に使っていたため、当時すでにこれらが廃絶されていた北海道本島のアイヌの移住によって千島アイヌが成立したとは考えにくい。いっぽう、サハリンでは近代まで土器や竪穴住居が使われていたと考えられることから、千島アイヌの祖先がこの地域からやってきた可能性は想定できる。南千島では土器や竪穴住居の終焉年代は不明であるが、15世紀以降もそれらが一部で使われていた可能性は残されているため、上記2つの仮説はどちらも成り立つ余地がある。本研究では、千島アイヌの起源をめぐるとした仮説を、考古学的に検証することを目的のひとつとした。

カムチャツカからの撤退年代は、17世紀後半から18世紀代のどこかにあることは特定されていた。しかし、正確

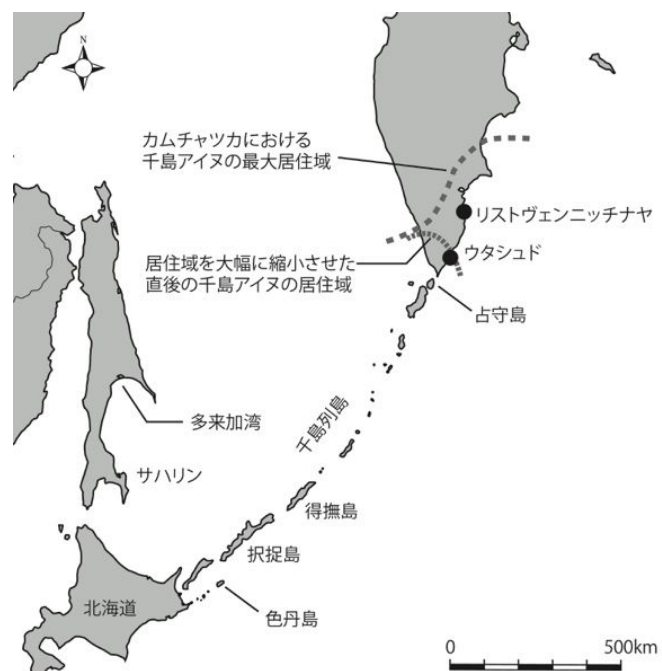


図1 関連地図

なタイミングが絞りきれないため、その精度をさらに高めることを目指した。千島アイヌの歴史研究にとって、この年代決定はきわめて重要な意義がある。島嶼生物地理学的な観点からみて、大陸の一部であることで種類・量ともに資源が豊富なカムチャツカは、資源が格段に乏しい千島列島よりも生存にとってはるかに有利である。そうしたカムチャツカから撤退した理由を探るために、まずはその正確な年代を把握する必要があるからである。

資源が豊富なカムチャツカから撤退したことにより、生業戦略の練り直しを迫られたことも予測される。しかし、千島アイヌの生業については、民族誌の断片的な記述以外に手がかりがほとんどないのが実情である。本研究では、考古学的な遺跡から出土した物質資料の吟味を通して、この問題に接近する。

3. 研究の方法

千島アイヌは、アイヌ語使用集団の南からの移住によって、15世紀半ばに成立したことが確実視できる。よって、その歴史の比較的古い段階(15から17世紀)における物質文化を、これと同時期が若干さかのぼる時期のサハリン、南千島などと比較して、もっとも類似したものがある地域を千島アイヌの故郷とみなすことができる。比較材料となる考古資料には、土器と竪穴住居がある。しかし、サハリンと南千島では当該期の竪穴住居の実態は不明であることから、検討材料はアイヌ語使用集団によって使われていた内耳土器(ないじどき)に限られる。この土器は、中世日本の鉄鍋の模倣品である。鉄鍋と同じように、囲炉裏のうえに吊るして加熱調理に利用するために、土器の内側に複数の耳がついているのが特徴である。本州から輸入される鉄鍋の不足分を補うためにこの土器が作られていたと考えられるが、北海道ではまれにしか出土しない。対照的に、サハリン、北千島、カムチャツカ南部では、一般的にみられる考古資料といってよい。

故地探索のもうひとつの方法は、イヌのDNA分析である。千島アイヌが残した遺跡から出土したイヌの骨が北海道大学植物園に保管されている。イヌのmtDNAは、環オホーツク海地域に広く分布するハプログループもあるが、地域的に限定されるハプログループもあるため、北大植物園保管資料の分析がサハリン起源説の検証に役立つ可能性がある。

カムチャツカ半島からの撤退時期の特定には、遺跡からえられた木炭の放射性炭素年代測定を用いる。検討対象として、居住域が縮小した直後の千島アイヌのテリトリーのうちその北限の可能性のある遺跡に着目する。撤退時期だけではなく、どの程度の規模で居住域が狭くなったのかも明らかにできるからである。そのための有力な候補が、カムチャツカ半島東南部のリストヴェンニツチナヤ湾の遺跡群である。カムチャツカにおける居住域が大幅に縮小した段階で千島アイヌが使っていた内耳土器は「II式」である。これまでに公表されている考古学的情報によれば、II式土器の北限の候補のひとつがリストヴェンニツチナヤ湾である。そこにII式土器が確実に存在しているならば、カムチャツカにおける居住域は短期間のうちに220km縮小したことになる。逆にII式土器がない場合、II式土器の確実な北限はさらに110km南のウタシド遺跡群となるため、居住域の縮小幅は330kmとより大きくなる(図1)。II式土器が存在しない場合でも、リストヴェンニツチナヤ湾ではII式土器の成立直前まで千島アイヌが暮らしていた蓋然性が高いことが土器の型式論的分析から予測されているため、居住域縮小が生じた直前の時期にもとづいて居住域が縮小した時期を推定することが可能である。本研究では、既存資料と新たな発掘でえられた土器や木炭を利用して、この課題を考察する。

経済の変化は、遺跡から出土した動物骨、石器を用いて検討する。理論的には、カムチャツカが広く利用されていた比較的古い段階においては、ヒグマ、ヘラジカ、トナカイ、ウサギなどの陸生動物が千島列島にも相対的に多く持ち込まれていたと予測される。黒曜石も同様であろう。しかし、カムチャツカを本拠地とすることを止めたあとでは、千島列島内で入手困難なこれら資源の利用は低調になると考えられる。かわって、毛皮交易に傾斜することで日用品の供給を外部に依存するようになったとの仮説が提起できる。本研究では、既存の発掘資料だけでなく、北千島で実施した新たな調査によってえられた資料も利用し、動物骨の組成と黒曜石製石器の剥離技術(原料をどの程度節約して使っていたかに着目する)からこの仮説を検証する。

4. 研究成果

千島アイヌの故地推定を目的として、サハリン、北海道、南千島、北千島、カムチャツカから出土した内耳土器の型式論的な検討を実施した。その結果、北千島・カムチャツカの古い段階(15~17世紀)の内耳土器(Ia式、Ib式)と明確な共通性をしめす内耳土器は、他の地域では確認されなかった。ただし、製作技術のうえで類似性の高い特徴をもつ事例は、少数ながらサハリン南部の西海岸や択捉島で確認することができた。これらの地域が千島アイヌの故地である可能性は残される一方、北海道の集団が移住して千島アイヌになった可能性はやはり否定された。サハリン南部では一定程度の土器資料が蓄積されてきているが、南千島(および得撫島)における内耳土器の情報はまだ非常に少ないため、今後も注視する必要がある。

北千島およびカムチャツカにおける15~17世紀における遺跡や遺物の多さ、分布域の広さを考えると、かなりの人数がこの地に移住してきたと思われる。にも関わらず、故地となるべきサハリンや南千島で系統を辿ることができる物質文化が明確にはみられないのは奇妙である。識別しやすい縄文、続縄文文化の土器、または量が多いオホーツク文化の土器などの影に隠れて、内耳土器の情報にバイアスがかかっている可能性もある。今後は、これまで内耳土器として認識されてきた資料以外にも手をひろげて検討する必要がある。イヌのDNA分析では環オホーツク

地域で広く認められるハプログループが確認されたため、千島アイヌの故地推定につながる手がかりをえることはできなかった。

カムチャツカからの撤退時期は、18世紀初頭と特定された。リストヴェンニッチナヤ湾での発掘調査では多数の内耳土器をえることができたが、型式はすべてIa式かIb式で、II式はまったく含まれていなかった。1920年代にスウェーデンのチームによって同じ遺跡群で発掘された資料の調査によっても、この理解が裏付けられた。この遺跡群でもっとも新しいIb式の存続時間は17世紀末までであり、18世紀初頭には続かないことが放射性炭素年代測定で明らかになった。つまり、千島アイヌは17世紀末まではカムチャツカ南部に広く居住しており、この段階ではまだリストヴェンニッチナヤ湾にも居住していた。しかし、その次の段階であるII式の土器が利用されはじめる直前に千島アイヌはリストヴェンニッチナヤ湾を立ち去って南へ移動したのであり、その移動が17世紀末の直後、つまり18世紀初頭に生じたのである。これによりII式の北限は、リストヴェンニッチナヤ湾よりもさらに110km南のウタシュド遺跡群であることが確定し、Ib式の時期からII式の時期にかけて千島アイヌの居住域の北限は一挙に330kmほど南下し、カムチャツカ半島の利用が大幅かつ急激に縮小されたことが判明した。18世紀初頭は、きわめて示唆的な年代である。なぜなら、この時期からロシア人が本格的にカムチャツカ半島に侵入し、毛皮税を徴収するために先住民とはげしく戦闘を繰り返すようになったからである。

経済変化に関わる資料を収集するため、千島アイヌが千島列島内で本拠地としていた占守島の遺跡の発掘調査を行った。カムチャツカ撤退まで(17世紀末まで)とカムチャツカ撤退後(18世紀初頭以後)の動物骨の組成を比較することを目的とした調査である。第二次世界大戦中とその後の土地利用によって遺跡がはげしく破壊されていたが、残存している可能性が高い場所を選択して調査を行った。9遺跡27箇所の試掘坑のうち、7遺跡13試掘坑から動物遺体を回収することに成功したが、年代測定により多くの動物骨がオホーツク文化に属することが明らかになった。確実にアイヌ文化期に属するものは2~3箇所しかなく、その量も非常に少なかった。資料不足を補うため、米国ワシントン大学が2000年代に千島列島全域で実施した大規模な調査でえられた動物骨も検討対象に加えたが、それでもアイヌ文化期を古い段階と新しい段階に分けて検討できる資料体はなかった。ただし、北・中千島では、ヒグマ、トナカイ、ヘラジカ、ウサギなどカムチャツカ半島から持ち込まれたと考えられる動物そのものがきわめて少ないことが確認できた。したがって、比較的古い段階(15から17世紀)においても、カムチャツカ産の動物が食料として北千島に積極的に持ち込まれていたとは考えにくいと推定された。

この点は、カムチャツカ半島南端のロパトカ岬周辺から回収された動物骨コレクションの再検討からも追認された。この場所は、明らかにカムチャツカと北千島の物資流通の中継地となっていた場所であるが、多数出土しているトナカイのほとんどが角であった。骨角器の材料として中継地に角が蓄積されてはいるが、大陸産の陸生動物が食料として千島列島に持ち込まれているわけでは必ずしもないのである。カムチャツカの食料資源はカムチャツカで、北千島の食料資源は北千島で消費されていた可能性が高く、それゆえ資源量が多いカムチャツカが本拠地として利用されていたのであろう。

しかし、18世紀初頭に何らかの理由で千島アイヌがカムチャツカから撤退せざるを得なくなると、海洋資源への依存度が必然的に高まったと予測される。食料事情が相対的により厳しい千島列島のなかだけで生活しなければならなくなったときに、交易のために毛皮獣狩猟の重要性がより高まったかどうかは現時点ではまだ判断できていない。ラッコの出現率が重要な指標になるが、占守島ではラッコの骨がオホーツク文化の段階から比較的高い頻度で検出されることがわかりつつある。したがって、現在のデータからでは、カムチャツカから撤退したことにより千島アイヌが毛皮交易への依存度を高めたとは必ずしもいえず、むしろ毛皮獣狩猟の重要性はオホーツク文化期からすでに高かった可能性も考慮されるべきである。千島列島全域を網羅するワシントン大学保管の動物骨の基礎情報は、研究代表者が著者に加わった論文においてその概要が初めて開示された。北千島に関しては、本プロジェクトでえられた資料のほうが規

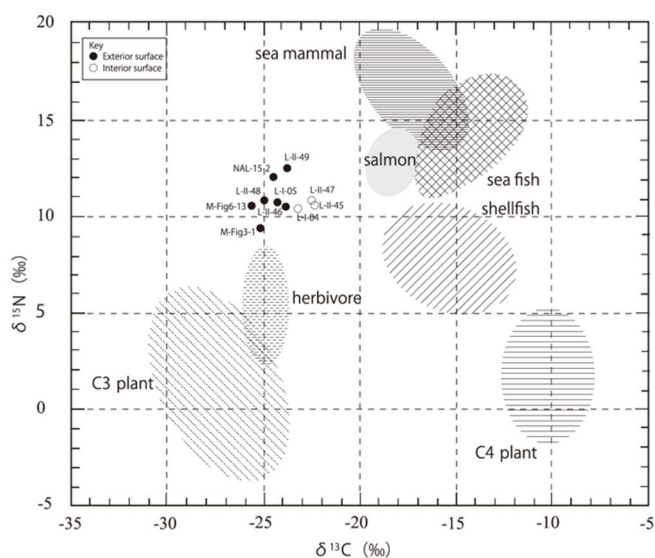


図2 カムチャツカ出土内耳土器附着炭化物の窒素・炭素安定同位体比分析結果

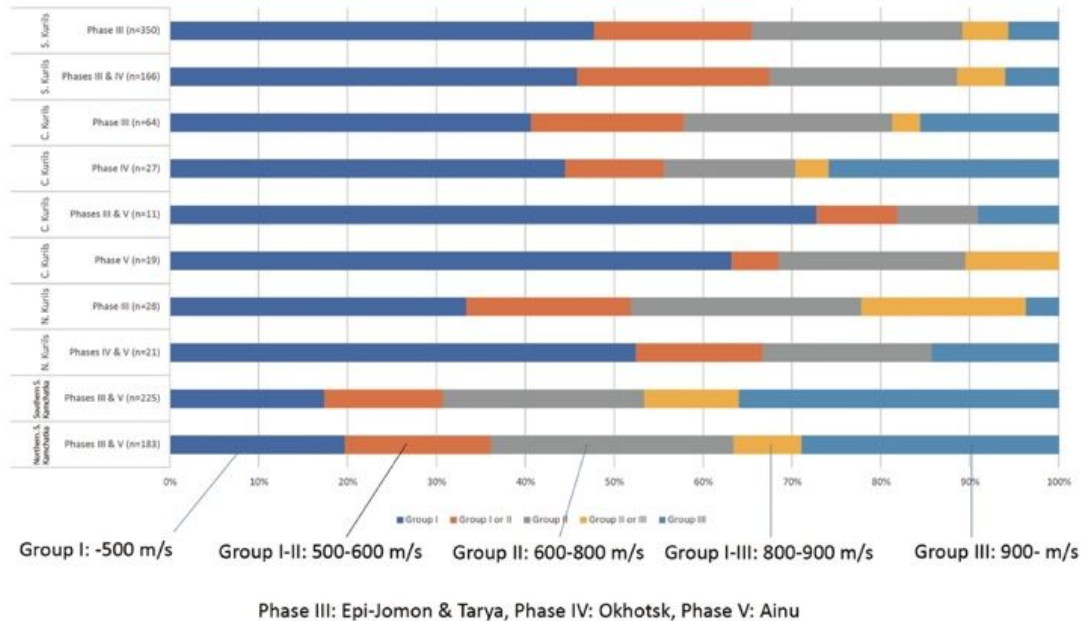


図3 千島列島・カムチャツカ南部出土黒曜石製剥片の剥離速度

模の大きい動物骨コレクションとなるが、今後は両コレクションの総合的な分析を通して毛皮獣狩猟の重要性が時期によって変化したのか否かをさらに詳しく検討する予定である。

千島アイヌが実際に食していた食料資源の内容は、土器に残存した炭化物から解明された。炭素・窒素安定同位体比分析の結果は、海産物と草食動物や C3 植物が混在した食料が調理されていたことを強く示唆している（図 2）。燃料に起源する炭素の影響をあまり受けていない土器内面の結果を重視すると、海産物には非常に高い窒素安定同位体比値をもつ鰭脚類か大型の魚類が多く含まれていたと推定される。千島アイヌの民族誌ではトドが積極的に利用されていたことが記されているが、同位体比分析の結果からみても海洋生態系の上位に位置するトドやキタオットセイ、マダラなどが重要な食料であった蓋然性は高いと判断できる。実際、北・中千島ではマダラが多く出土するが、一方で鰭脚類の出土量は必ずしも多くはない。この点をどのように評価するかが、今後の課題として残されている。

大陸産資源の利用という観点から、黒曜石製剥片・碎片のフラクチャー・ウイングに着目して剥離方法を推定した（Hutchings, W. K. 1999 Quantification of fracture propagation velocity employing a sample of clovis channel flakes, *Journal of Archaeological Science*, 26; 高倉純・出穂雅実 2004「フラクチャー・ウイングによる剥離方法の同定」『第四紀研究』43(1)）。剥離速度がもっとも遅い 500m/s までのグループ I の比率は、中千島でもっとも高く、カムチャツカでもっとも低い（図 3）。資源量が乏しい地域では、岩石をより効率的に利用するために、押圧剥離による二次加工や刃部再生がより高い頻度で採用されていたと考えられる。しかし、千島列島ではやはりアイヌ文化期（図 3 の Phase V）のなかを新古の二段階に分けて検討できる黒曜石製剥片・碎片資料がなかったため、カムチャツカ撤退前後の状況を比較することはできなかった。

本研究の副産物として、世界中に散らばる千島アイヌの物質資料が整理され、内容を明確にすることができた。千島アイヌの民具資料の主要コレクションは、すでに 90 年代に基礎調査が行われていたが（SPb アイヌプロジェクト調査団編 1998『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』；小杉康 1997「物質文化からの民族文化誌の再構成の試み—クリアルアイヌを例として—」『国立民族学博物館研究報告』21(2)など）、考古資料に関してはほとんど手つかずの状態がつづいていた。しかし、2010 年代にはいって、河野コレクション（旭川）、馬場脩コレクション（函館）、北大植物園コレクション（札幌）など、国内の主要コレクションが相次いで再整理・再検討された（高瀬克範 2013「河野コレクション（旭川市博物館収蔵）の内耳土器」『北大史学』53；高瀬克範・鈴木建治 2013「馬場コレクションの再検討—北千島の竪穴住居・土器・石器の基礎的研究—」『北海道大学文学研究科紀要』140；高瀬克範・加藤克 2016『千島列島出土考古資料目録（北大植物園資料目録第 8 号）』北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園）。本研究では、さらにロシア（マガダン、ユジノサハリンスク、ペトロパヴロフスク・カムチャツキー）、アメリカ（シアトル）、スウェーデン（ストックホルム）など国外に保管されている千島アイヌ関連の考古資料に関する情報を網羅的に収集し、検討することができた。一部についてはすでにカタログを刊行し、研究にも利用しているが、投稿済ではあるが未刊行の論文もある。これらが出揃うことによって、千島アイヌに関わる物質資料の情報は民具資料、考古資料ともに国際的に共有され、その歴史の研究がさらに進展することが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計23件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 5件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 Takase, K.	4. 巻 なし
2. 論文標題 The occurrence and temporal change in habitat of the Kuril Ainu: perspectives from archaeology	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 33rd International Abashiri Symposium	6. 最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 『』	4. 巻 24
2. 論文標題 2016	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 21-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 高瀬克範	4. 巻 なし
2. 論文標題 千島列島進出集団における居住範囲の変異とその背景	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 理論考古学の実践 I 理論篇（安斎正人編，同成社）	6. 最初と最後の頁 370-394
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 ,	4. 巻 IX
2. 論文標題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 IX (:)	6. 最初と最後の頁 98-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takase, K.	4. 巻 13
2. 論文標題 Pit dwellings of the Nalychevo Culture in Southern Kamchatka and the Northern Kuril Islands	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Graduate School of Letters (Hokkaido University)	6. 最初と最後の頁 11-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 手塚 薫	4. 巻 なし
2. 論文標題 非国家社会における戦争と平和	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 はじめての人文学 文化を学ぶ, 世界とつ繋がる (佐藤貴史・仲松優子・村中亮夫編, 知泉書館)	6. 最初と最後の頁 137-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 手塚 薫	4. 巻 なし
2. 論文標題 流れ寄る樹: 千島列島における木材利用の歴史	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アイヌ文化と森 人々と森の関わり (手塚薫・出利葉浩司編著, 風土デザイン研究所)	6. 最初と最後の頁 107-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野哲也・赤沼英男・目時和哉	4. 巻 54
2. 論文標題 6 ~ 9 世紀における北海道出土鉄器の供給地域について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道考古学	6. 最初と最後の頁 75-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takase, K., K. Tezuka, O. Shubina, I. Samarin, B. Fitzhugh, M. Etnier, A. Shepova and I. Markov	4. 巻 なし
2. 論文標題 Preliminary Report on Archaeological Investigations on Shumshu Island, the Northern Kuril Islands	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 18th Annual Meeting of Research Association of North Asia	6. 最初と最後の頁 49-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小野哲也・赤沼英男・目時和哉	4. 巻 34
2. 論文標題 前近代の北方社会における鉄器流通実態の解明(3)-古代関東地方出土鉄器との比較検討-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 岩手県立博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 13-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takase, K.	4. 巻 なし
2. 論文標題 Archaeology along the coast of the Okhotsk Sea: Achievements, problems and perspectives	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Proceedings of the 30th International Abashiri Symposium [the 30th Anniversary Meeting] Study of Northern Peoples for 30 Years: Progress, Challenges and Roles of Museums	6. 最初と最後の頁 39-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takase, K. and A. I. Lebedintsev	4. 巻 11
2. 論文標題 A study on pottery from Southern Kamchatka in T. M. Dikova and N. N. Dikov collections	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of the Graduate School of Letters (Hokkaido University)	6. 最初と最後の頁 9-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Takase, K.	4. 巻 51
2. 論文標題 Long-term marine resource use in Hokkaido, Northern Japan: new insights into sea mammal hunting and fishing	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 World Archaeology	6. 最初と最後の頁 408-428
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/00438243.2019.1699854	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Gjesfjeld, E., M. A. Etnier, K. Takase, W. A. Brown and B. Fitzhugh	4. 巻 51
2. 論文標題 Biogeography and adaptation in the Kuril Islands, Northeast Asia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 World Archaeology	6. 最初と最後の頁 429-453
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/00438243.2019.1715248	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Takase, K.	4. 巻 15
2. 論文標題 Diet of the Kuril Ainu as evidenced from charred materials adhering to ceramic surfaces	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of the Faculty of Humanities and Human Sciences (Hokkaido University)	6. 最初と最後の頁 37-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14943/jgs1.15.37	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 手塚 薫	4. 巻 2020-1
2. 論文標題 アイヌ文化研究における千島列島の意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 グリーン・パワー (森林文化協会)	6. 最初と最後の頁 21-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 内山幸子	4. 巻 なし
2. 論文標題 オホーツク文化の精神世界における「火」の意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 世界と日本の考古学 オリーブの林と赤い大地 (六一書房)	6. 最初と最後の頁 219-235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takase, K.	4. 巻 11 & 12
2. 論文標題 Archaeological materials from the Kuril Islands and Sakhalin housed in Hokkaido University Natural History Museum (Botanic Garden)	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 132-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高瀬克範	4. 巻 なし
2. 論文標題 オホーツク海北岸・カムチャツカ半島からみた「サハリン・千島ルート」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 「サハリン・千島ルート」再考 (北海道考古学会)	6. 最初と最後の頁 61-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高瀬克範	4. 巻 4
2. 論文標題 カムチャツカ半島南部出土内耳土器とその千島アイヌ史上の意義	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 論集忍路子	6. 最初と最後の頁 17-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高瀬克範	4. 巻 38
2. 論文標題 斜里町オシヨコマナイ河口東遺跡出土石器の使用痕分析	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 斜里町立知床博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 手塚 薫	4. 巻 なし
2. 論文標題 北東アジア経済圏における狩猟採集民と長距離交易	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 狩猟採集民からみた地球環境史：自然・隣人・文明との共生 (池谷和信編, 東京大学出版会)	6. 最初と最後の頁 178-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ,	4. 巻 24
2. 論文標題 (, , 24, c.3-20.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 3-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 9件)

1. 発表者名 Takase, K.
2. 発表標題 Chronology, occupation, and trade in Northern Japan and the Kuril Islands
3. 学会等名 Interaction in the Circumpolar Pacific Sphere: 5000 BC to AD 1 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高瀬克範
2. 発表標題 千島アイヌの出現と居住域の変化 考古学からの展望
3. 学会等名 環北太平洋地域の伝統と文化3 カムチャツカ半島・千島列島（北海道立北方民族博物館）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ben Fitzhugh, William Brown, Nicole Misarti, Katsunori Takase, and Andrew Tremayne
2. 発表標題 Integrating human paleodemography and ecology around the North Pacific Rim
3. 学会等名 Ecosystem Studies of Subarctic and Arctic Seas (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Fitzhugh, Ben, Jason Addison, William Brown, Bruce P. Finney, N. Harada, Nicole Misarti, Kana Nagashima, Katsunori Takase and Andrew Tremayne
2. 発表標題 Did Holocene variability in Aleutian low dynamics force oscillations in marine ecosystems and human subsistence harvesters?
3. 学会等名 GSA Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 , V.
2. 発表標題 -
3. 学会等名 : (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高瀬克範
2. 発表標題 世界有数の過酷な海と島に生きる 千島の歴史にまなぶ
3. 学会等名 海の宝をめぐる人と環境 海と日本PROJECT
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Takase, K., K. Tezuka, O. Shubina, I. Samarin, B. Fitzhugh, M. Etnier, A. Shepova, I. Markov
2. 発表標題 Preliminary Report on Archaeological Investigations on Shumshu Island, the Northern Kuril Islands
3. 学会等名 18th Annual Meeting of Research Association of North Asia (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高瀬克範
2. 発表標題 オホーツク海北岸・カムチャツカ半島からみた「サハリン・千島ルート」
3. 学会等名 北海道考古学会研究大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Takase, Katsunori
2. 発表標題 Archaeology along the coast of the Okhotsk Sea: Achievements and perspectives
3. 学会等名 The 30th International Abashiri Symposium Study of Northern Peoples for 30 Years: Progress, Challenges and Roles of Museums (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 高瀬克範
2. 発表標題 ステン・ベルグマンコレクション（ストックホルム）の日本・千島・カムチャツカ出土考古資料
3. 学会等名 北海道考古学会月例研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Takase, K.
2. 発表標題 Southern Kamchatka and the Kuril Islands in the Neolithic and the Development of Maritime Adaptations in Hokkaido
3. 学会等名 Workshop “ Investigating Neolithic Trajectories in Northeast Asia ” (Hokkaido University) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高瀬克範
2. 発表標題 北千島・カムチャツカのアイヌ遺跡
3. 学会等名 2019年度地域の文化財普及啓発フォーラム 北海道の古代集落遺跡 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高瀬克範
2. 発表標題 北千島・カムチャツカのアイヌ遺跡 (招待講演)
3. 学会等名 2019年度地域の文化財普及啓発フォーラム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Takase, K. and A. I. Lebedintsev	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Archaeology Laboratory, Graduate School of Letters, Hokkaido University and The North-Eastern Interdisciplinary Scientific Research Institute, FEB RAS	5. 総ページ数 126
3. 書名 Illustrated Catalogue of Archaeological Materials from Kamchatka in T. M. Dikova Collection Preserved in the North-Eastern Interdisciplinary Scientific Research Institute, Far Eastern Branch, Russian Academy of Sciences (NEISRI FEB RAS), Magadan, Russia	

1. 著者名 高瀬克範	4. 発行年 2017年
2. 出版社 北海道大学大学院文学研究科考古学研究室	5. 総ページ数 97
3. 書名 北海道猿払村エサヌカ2遺跡出土の考古資料	

1. 著者名 増田隆一 編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 384
3. 書名 ヒグマ学への招待 ~ 自然と文化で考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

千島アイヌ考古学プロジェクト https://hokudai-koko.sakura.ne.jp/kaap/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	内山 幸子 (Uchiyama Sachiko) (20548739)	東海大学・国際文化学部・准教授 (32644)	
研究分担者	手塚 薫 (Tezuka Kaoru) (40222145)	北海学園大学・人文学部・教授 (30107)	
研究分担者	江田 真毅 (Eda Masaki) (60452546)	北海道大学・総合博物館・准教授 (10101)	
研究分担者	増田 隆一 (Masuda Ryuichi) (80192748)	北海道大学・理学研究院・教授 (10101)	